



たすく

FREE

2022.5

医師は「免疫力」という言葉を使わない？
発酵食品が有効？

知っておきたい「免疫」のホント

「法医学」の世界

アンナチュラルな死を解明、未来に繋げる

山本 一博

鳥取大学医学部附属病院 副病院長
第一内科診療科群 主任診療科長

鳥大の人々

●病院長対談

「たすくのタスク」大宮エリー（作家・画家）

ファッション番長が辛口でぶった切る？

とりだい病院★ファッションチェック！

駆けだし小説家の独り言「ふみ日記」

頭に浮かんでくるのは 期待に応えることができなかった**患者さんの顔**

山本 一博 鳥取大学医学部附属病院 副病院長・第一内科診療科群 主任診療科長

山本の専門である「循環器内科」は「心臓血管外科」とともに生死に直結する臓器——心臓を扱う。心臓治療では、かつては明確に区別されていた内科と外科の区別が曖昧になりつつある。そして、医師以外の多職種の協力が必須だ。診療科、そして職種の垣根を越えた「チーム医療」が最も必要な分野とも言える。



写真・中村 治

鳥取大学医学部附属病院第一内科診療科群、主任診療科長である山本一博が、自らの進む道を循環器内科と決めたのは、大阪大学医学部の2年生のときだった。きっかけは高校時代の同級生が心臓弁膜症手術を受けたことだった。

心臓は体内に血液を循環させるポンプ、と表現される。血液は心臓から押し出され、肺で受け取った酸素を全身に届けて再び、心臓に戻る。血液が間違った方向に流れないように、心臓には4つの「弁」がある。その弁が何らかの問題を抱えて本来の役割を果たせない症状を「心臓弁膜症」と呼ぶ。

「胸を開けて心臓を手術すると聞くと当然不安になりますよね。当時は手術による合併症の危険性が高く、今と比べると死亡率も高かった。そこで医学部に通っているばかりに色々と聞いてきたんです。ところが、最初の2年間はほぼ教養課程で全然医学的な勉強はしていないから、何も知らない。それでもなんとか力になりたいと思って調べているうちに、面白そうだなと思ったんです」

今となっては自分の教えたことは、彼の質問への答えになっていたかどうか分かりませんが、と笑う。幸い、友人の手術は成功した。

そもそも「循環器内科」という単語を耳にしたことはあっても、正確に定義できる人間は医療関係者、当該患者以外では稀だろう。

病気にかからない、あるいは怪我をしないという人はいません。どんな人にとって医療は生活に切り離せない。しかし、敬遠したり、垣根が高いと感じる人も少なくありません。そこで、医療の世界を「いかに知ってもらうか」↓「いかに知る」↓「カニジル」となりました。

もちろん、とりだい病院のある鳥取県の名産品、〆蟹のだし(味噌)汁〆にも掛けています。蟹汁のように、皆さまに愛される存在でありたいという思いを込めました。

「カニジル」が第一にこだわるのは「ファクト」です。

医療に関して、不正確な情報が世の中にはあふれています。短く、分かりやすい言葉は人々の心に突き刺さりやすい。しかし、現実はその簡単ではありません。分かりやすくするため、大切なものを多くそぎ落としています。

医療は、科学的に証明されていることとそうでないことを完全に二分できない世界です。その時点でのファクト＝エビデンスを重んじていても、そのファクト自体がひっくり返ることもあり得る。大切なのは、愚直に取材し、確かな文獻に当たり、真摯に考える——それが我々の姿勢です。

昨今の新型コロナウイルスに関する報道で「インフォデミック」という言葉を耳にした方も多いでしょう。これは情報が感染症のように拡散し現実社会に影響を及ぼす現象を指します。SNSなどの発達により、我々が手にする情報は爆発的に増えました。その中から、いかに正確な情報を選び取ることができるか。生命の危機にも直結する

カニジル宣言

医学では、その力が特に必要になってきます。

米子市出身の経済学者、宇沢弘文は著書の中で「社会的共通資本」を一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような社会的装置」と定義しました。また「一人ひとりの人間的尊厳を守り、魂の自立を支え、市民の基本的権利を最大限に維持するため不可欠な役割を果たすもの」とも書いています。

とりだい病院は、医療機関であると同時に、この地域でもっとも人が集まる場所です。〈すぐれた文化を展開〉し、〈人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持〉する可能性を秘めているという意味で、まぎれもない「社会的共通資本」であると我々は考えます。

とりだい病院のある米子市を含めた山陰地方は、「過疎」「超高齢化社会」という日本が抱える問題が凝縮されています。一方、人との温かいつながり、自然など、都会にはない豊かさがある。問題を解決しつつ、豊かさをどう維持していくか——。先んじて未来の問題を解決できる場所なのです。

新型コロナウイルスは日本社会の変化を促すことになりました。リモートワークが進めば、住む場所を選びません。都市と別の視線を持つことが、ウイズ・コロナ、アフター・コロナ時代のニューノーマルとなるかもしれません。

カニジルは、ファクト重視、地方からの文化発信にこだわっていきます。

C O N T E N T S

03	鳥大の人々 ——鳥取大学医学部附属病院 副病院長・第一内科診療科群 主任診療科長 山本一博 アンナチュラな死を解明、未来に繋げる
06	「法医学」の世界
10	医師は「免疫力」という言葉を使わない？ 発酵食品が有効？ 知っておきたい「免疫」のホント
13	ファクション番長が辛口でぶった切る？ とりだい病院☆ファクションチェック！
16	病院長が時代のキーパーソンに突撃！ たすくのタスク—— 作家・画家 大宮エリー
20	境港在住、駆けだし小説家の独り言 「ふみ日記」 第二回 もし、あのときとりだい病院に入院していたら
21	とりだい「人生を変えた一冊」 看護部 為本真吏
22	カニ箱 ——カニジルご意見箱 Totori Breath 進化は知識のバトン 飛鳥の森——編集後記
23	トリビート
24	フォトグラフィアー 中村 治が切り取る、 とりだい病院の日常

Kanijiru vol.10 Staff

スーパーバイザー
結城豊弘

編集長
田崎健太

編集
中原由依子
大川真紀香
西海美音
井野寿音

イラスト
矢倉 麻祐子

写真
中村 治

デザイン
三村 漢

循環器とは栄養物や酸素などを体内に運ぶ、そして体内から老廃物を集めてくる器官だ。心臓の他、血管、リンパ節、リンパ管が含まれる。循環器内科ではこれらの器官——主として心臓を扱う。

少々ややこしいのは心臓や血管の名前のつく診療科に「心臓血管外科」があることだ。

「病院によつては循環器内科を心臓内科と呼んでいるところもあります。学会が循環器という言葉を使っているので循環器内科を使うところが多い。不思議と心臓血管外科は循環器外科とは呼ばない。ともかく心臓を扱う診療科は循環器内科と心臓血管外科の2つだけです」

内科は基本的に薬剤投与による治療、外科はメスなどを使った手術で治療すると区別されてきた。近年、特に心臓に関してこの区分が曖昧になりつつあると山本は言う。キーワードは「低侵襲」である。

開胸手術を行うと身体への負担——侵襲が大きい。侵襲を減らせば、手術後の回復も早く、社会復帰が容易になる。代表的な低侵襲治療が、ロボット支援手術、そしてカテーテル手術である。カテーテルは「体内に挿入し、液を注入、排出するための管」の意である。医学の現場でカテーテル手術は、血管を伝って器具を患部まで運ぶ治療を指す。

「ぼくが大学を卒業する頃、カテーテル（の管）が太かったせいか、まだ外科もやっていたんです。それがだんだん細く

う方が非常に多かった」

施術するかどうかは、そのメリットとデメリットを鑑みなければならない。そのためかつては手術を選択するという決断は難しかった。

「今の植込み型補助人工心臓は小柄な日本人の身体にも埋め込めるぐらいの大きさになっていきます。外のバッテリーとつながる必要はありますが、担いで家に帰ることもできる。合併症も減っており、昔と比べると患者さんのQOL（クオリティ・オブ・ライフ）は雲泥の差だと思います」

前述のように心臓移植を行うのは比較的若い患者が少なくない。支えるべき家族がある、あるいはまだ将来があるはずの人たちである。

「心臓移植適応の患者さん含め、心臓病の患者さんについては、今ある治療法が当時はなかった。あるいは、手順に則ってやっていたのに、非常に低い頻度だったはずの合併症が起きてしまったなど、期待に応えることができなかった患者さんの顔が頭に浮かんでくることがありますね」

チーム医療によって、治療方法を変えずに「再入院」が半分になった

広島で生まれ、大阪で学んだ山本が米子の地を踏んだのは2011年7月のことだ。とりだいい病院で感じたのは各診療科の「垣根」が低いことだった。

「大都市の大学病院と比べると」人が十



なり今では内科がやることが多くなったという歴史があります」

医療に通じていない人間にとってカテーテル手術は魔法のように映る。

まずは手首か太ももの付け根に局部麻酔を行い、専用針で血管に穴を開ける。この血管内に「挿入シース」という「管」を使って穴を広げる。医師はレントゲン映像を見ながらこの穴から、細く柔らかい針金状のガイドワイヤーを患部まで入れる。その後、ガイドワイヤーに沿わせてカテーテルを運ぶのだ。

例をあげると、心臓治療では経カテーテル大動脈弁留置術（TAVI）というカテーテル手術がある。

「人工弁を大動脈弁のところに置いてくる手術です。カテーテルを使えば、心臓を止めて胸を開けなくていい」

近年、医療の世界では「チーム」という言葉が多用される。循環器内科と心臓血管外科を合わせた「ハートチーム」も

分に足りていない部分もありました。それを補うためにみんなで協力しましょうという印象。かつていたところが協力していなかったというわけではなくて、とりだいいはそれがより強く感じられた」

とりだいい病院の循環器内科では、看護師、理学療法士、薬剤師など多職種が「チーム」として治療に関わっている。「心臓を保護するお薬に血圧を下げる効果がありますって書かれているとします。患者さんは自分の血圧は下がったから飲まなくてもいいと勝手に解釈されてしまうことがある。その薬の効果は血圧を下げるだけではないのに」

このチームが動き出してから、退院した後には再入院する頻度が半分に減ったという。使用する薬、治療は何も変えていないにも関わらず、である。

「医師が患者さんを外来で診るのはせいぜい月に1回か2回。それも短時間です。それ以外の時間は患者さんがどのように過ごされているのか分からない。患者さんに治療の意味を理解して頂き、日常生活でどれぐらい注意できるか。現在の医療は進んでいるので、1人の医師がやれることは限られている。おのおの専門を持つているメディカルスタッフの特性を活かして、レベルの高い医療を行なう。そうでないと大学病院として求められる医療を提供できない」

その意味で、垣根の低いとりだいい病院にはチーム医療になじみやすい土壌があ

その一つである。とりだいい病院のハートチームではTAVIは心臓血管外科が主導している。

「他のカテーテル手術のように、いずれ（TAVIも）内科医が中心にやっていくことになるかもしれない。カテーテルを使っているんな治療ができるようになっていきます。将来は外科と内科の垣根がさらに不明瞭になっていくでしょうね」

心不全になりやすいのは高齢者という「誤解」

山本が心臓治療に惹かれたのは、「治療が上手いけば、結果がすぐに出るから」だった。心臓はもつとも命に直結する臓器である。その重要性に比して認知が低いと感じることもある。

「心不全という言葉をよく使うことがあります。心臓が悪いことを指す場合が多い。したがって、医者にとって心不全というだけでは診断をしたことになりません。というのは心不全というのは病名ではなく、動いたら息苦しくなるといった状態のことだからです」

心不全の原因となる病名としては、前出の弁膜症の他、心筋梗塞、心筋症、心内膜炎、心臓腫瘍などがある。

心臓に関する疾患はすぐに症状が出ないことが多い。

「異常はずいぶん前から始まっていたけれど、無症状で気がつかない。病気が

ると考えている。

とりだいい病院の副院長でもある山本は、病院全体のマネージメントにも携わっている。担当の一つは「働き方改革」だ。やや古いですが、と山本は前置きした上でこう説明する。

「2012年においてOECD加盟国のうち、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンを比較すると、人口1000人あたりの臨床医師はドイツが最多で40人。日本は最低の23人。一方、人口1人あたりの外来診察回数は最小のスウェーデンが30人、日本は最多の130人。この数字が今、急激に良くなっているとは到底思えません」

それでも医療体制を維持してきたのは、現場の医師、メディカルスタッフが「サビス残業」をしていたからだ。

「ぼくらが新人のときは急性心筋梗塞の患者さんが運び込まれる度に呼び出されるのが当たり前でした。あのときは病院に入ってきた急性心筋梗塞のすべての患者さんの治療には何らかの形で関わっていました。それが当然だと思っていましたね」

月曜日から金曜日、土曜日は半日勤務。ときに日付が変わってからミーティングが行われることもあった。

「昔は場数を踏むことが情報を得る唯一の手段でした。今は情報を得られるツールがたくさんある。他の医療施設での事例を遠く離れていてもウェブ等で知ることができる。あとはそれぞれがどこまで

一定レベルを超えたときに初めて、息苦しさなどの症状が出てくる」

また心不全になりやすいのは、高齢者というのも誤解であるという。

「心筋症の中に、拡張型心筋症、肥大型心筋症などの種類があります。拡張型心筋症の正式な病名は、特発性拡張型心筋症。特発性といっているのは、現在の医学では原因が解明されていないという意味です。日本ではこの拡張型心筋症の患者さんが、心臓移植治療を受けることが多い。心臓移植手術が保険適用されるのは65歳まで。ぼくが見た中では20歳前後の患者さんもいた」

心臓移植は亡くなった方の心臓を埋め込む手術だ。心臓移植手術自体は、心臓血管外科医が執刀。循環器内科は、移植手術までを担当する。厄介なのは、心臓を提供するドナーが現れるまで待機しなければならないことだ。それまでは機械式補助循環装置——補助人工心臓を身体に埋め込むことになる。

「90年代の植込み型補助人工心臓は非常に大きかった。アメリカ人など体格の大きい方でなんとか入るぐらい。一般的に用いていた体外設置型の場合は、身体の外に補助人工心臓のポンプそのものが見えているような状態です。また横に冷蔵庫のような駆動器を置いて管をつなぐ。家に帰るなんてことはできませんし、ずっと入院になる。何らかの合併症が起きてしまい移植手術にたどり着かないとい

自己研鑽の時間を取れるか。ぼくたちの時代のように見て覚えるというのはもう通用しません。それはいい悪いというよりも時代ですから」

医師という仕事はまっとうにやればやるほど楽ではない。そして、生死に直結する循環器内科の医師は、助けられたのではないかという悔いを抱えながら前を向かねばならない。生まれ変わっても医者になりますか、循環器内科を選びますかと訊ねてみると、山本は「そうですね、医者をやりたいです。たぶん循環器をやるでしょうね」と即答した。

米子での生活は10年半を超えた。この地で最も好きなのは、県境を越えた島根県の大根島の中海沿いを走っているときだ。「道路が本当に海面と同じ高さなんです。横を見たら海がある」

中海の水面は穏やかで清らかである。この地が優しい自然に包まれていることにはっとするのだという。

文・田崎健太

1968年3月13日京都市生まれ。ノンフィクション作家。早稲田大学法学部卒業後、小学館に入社。「週刊ポスト」編集部などを経て独立。著書に『偶然完全勝新太郎伝』『球重 伊良部秀雄伝（ミズノスポーツライター賞優秀賞）』『電通とFIFA』『真説・長州力』『真説佐山サトル』『全書女』『ドラゴン』『スポーツアイデンティティ』（太田出版）など。小学校3年生から3年間鳥取市に在住。2019年、「カニジル」編集長に就任。

山本 一博（やまもと かずひろ）

1986年大阪大学医学部卒業。大阪大学医学部付属病院第一内科、大阪警察病院循環器科、米国 Mayo Clinic 循環器内科リサーチフェロー、大阪大学医学部第一内科、大阪大学臨床医学学融合研究センター特任教授を経て、2011年鳥取大学医学部病態情報内科学教授。2015年副院長に就任。

アンナチュラルな死を解明、未来に繋げる

「法医学の世界」の



文・西海美香 写真・中村 治

誰にも平等に訪れる「死」。しかし、その時をどう迎えるのか、われわれは誰も予想できない。
大多数のひとは何らかの病気を患い、病院や自宅で医師に看取られながら命を終える。
それがいわゆる「ふつうの死」だ。すべての死のうち、およそ90%が「ふつうの死」といわれる。
それ以外の10%はアンナチュラルな死、つまり「異状死」なのだ。
この異状死の死因を医学的に究明し、法的判断の根拠として提供する法医学者の横顔、仕事、思いに迫る。

法医学者 飯野教授の「事件簿」

2020年の統計によると、日本国内の死亡者およそ138万人のうち約17万人が異状死である。異状死には、事件や事故で命を落とす、または自ら命の幕をひいた死もこの中に含まれる。

「異状死は無数にある。病名がついて、病院あるいは自宅で医師に看取られて亡くなる『ふつうの死』ではない死がすべて異状死（アンナチュラル）なんです」
そう説明してくれたのは、鳥取大学医学部法医学分野 教授 飯野守男だ。飯野は、鳥取県内で唯一の法医学解剖医である。

法医学解剖医とは、捜査機関から運ばれてくる遺体を解剖し、その死因を究明する専門医だ。医師免許を持つが、病気の患者さんを診察、治療することはない。死体を専門に診る医師ということになる。

この法医学解剖医は、国内にわずか150人しかいない。

「鳥取県では年間900体くらいの異状死があります。そのうち、われわれが解剖して調べるのは、およそ100体程度」
まず死体を検分するのは、捜査や法医学の特別な研修を受けた検視官である。この検視官が、法医学解剖が必要と判断したときに、飯野のもとに遺体が運ばれてくる。

法医学解剖は2種類。一つは、刑事訴訟

法に基づく「司法解剖」だ。事件性が疑われる場合に死因などを究明するために行なわれる。つまりは、裁判の証拠集めだ。例えば、刺殺事件において、加害者の供述どおり、凶器で刺して死に至ったのかどうかという因果関係を客観的に証明するのだ。

もう一つは、2013年に制定された「死因身元調査法」に基づく解剖だ。呼称は都道府県によって「調査法解剖」「新法解剖」など、さまざまだという。これは、これまで「ふつうの死」として扱われていたもののなかに、自殺にみせかけた他殺など、事件の見落としが多くあったため、新たにうまれた法律だ。

この法律が制定されるきっかけの一つになったのが、2007年に起きた「時津風部屋力士暴行死事件」だ。救急搬送された病院で急性心不全と診断されたが、遺体に残された外傷などから不審に思った両親が地元の大学に解剖を依頼したことで、暴行により死に至ったことが発覚した。

このように、犯罪による死かどうか分からない場合でも、裁判所の令状や遺族の承諾なしに警察署長の権限で死体を解剖できるようになった。

では実際に法医学者はどのように死体を診るのか。飯野教授の記憶に残る死を振り返ってもらおう。

Case ①

20年近く前のこと。当時16歳の男子高校生が部活中に倒れて亡くなった。当時は

AED（自動体外式除細動器）もなく、救急搬送された先で死亡と診断された。通常、こういう事例は解剖に回らないのだが、両親が解剖を希望した。なぜなら、亡くなった男子高校生には一卵性双生児の弟がおり、もしも、何か先天的な病気が原因であったなら、弟もそうなる可能性があることが危惧されたからだだった。

遺族の承諾を取って行う承諾解剖（当時）というかたちで、解剖を行った。すると、心臓に奇形が見つかり、運動することと血流が悪くなることが判明した。その結果を受け、弟もすぐに循環器内科で調べたが、幸いなことに、弟には同じ奇形は見つからなかった。

後日、ご両親から「弟は、お陰様で元気に生活しています」とお礼状が届いた。後にもさきにも、飯野が遺族からお礼状をもらったのはこの時だけである。

Case ②

車にはねられた人が入院し、警察は病状の把握と本人から事故の状況を訊くために何度も病院に掛け合ったが「治療中だから」と面会を断られた。しばらくしたら、突然「あの人、死にそうです」と病院から警察に連絡があり、その翌日に亡くなってしまった。遺体を解剖すると、事故による骨盤骨折があり、入院中



解剖室での飯野教授(中央)と中留准教授(左)、ブータンからの留学生ダワ・ザンボ(右)

されている。例えば、解剖謝金の場合、鑑定医が教授だと1時間9,360円。彼らの拠り所は犯罪を見逃さないという正義感、そして医療者、科学者として何が正しいかを検証するという使命である。

Case ③

夫婦と20代の娘さんの3人家族が住む家で火災が起きた。1階で趣味のオートバイいじりをしていた父親がうっかりガソリンをこぼし、そこに引火したのだ。父親は逃げて助かったが、家の中にいた奥さんと娘は間に合わず亡くなってしまった。1人は玄関先で発見され、もう1人は3階の娘さんの部屋で発見された。警察の所見では、火災発生時にキッチンにいた奥さんが玄関先で、娘さんは3階の自室で亡くなったのだらうということだった。しかし、解剖を開始する前に法歯学者（藤本秀子歯科医師／現鳥取大学特任准教授）が「これは違う」と指摘。遺体の歯を見た瞬間に20代と50代が入れ替わっていることが分かったのだ。解剖をすすめると、藤本の指摘通り、玄関先の遺体が娘さんで、3階で発見された遺体が母親だと判明した。

父親の話では、娘さんはもう間もなく結婚予定で、自室に結婚資金を置いていたのだという。おそらく、母親が娘を先に逃がし、お金を取りに3階に行ったのではないかと推測された。

Case ④

ホームレスの男性を利用した保険金殺人が10年以上前に大阪で起こった。犯行グループはあるホームレスの男性を誘い、養子縁組したうえで多額の生命保険を掛けた。その後、事故に見せかけて彼を殺そうと車で轢いたが、いったん命は取り留めた。事故の保険金を手にした後、再び彼を殺し遺体を山に埋めたのだ。殺害から1年経ち被害者の骨だけが見つかった。骨からどう身元を調べようかと考えたときに、以前事故で撮ったCT画像と照合することを思いついた。やってみると、骨にあった特徴も画像でぴったり一致し、ホームレスだった男性だと断定できた。

このような骨や火災現場の真っ黒焦げで身元もわからない遺体の特定には「スーパーインポーズ」という手法が使われる。これはcase 4で飯野が編み出したものだ。現在では5分程度で解析。世界中で活用されている。

お風呂で亡くなる人は交通事故で亡くなる人よりも多い

飯野には、相棒とも相談相手ともいえる人物がいる。法医学分野 准教授 中留真人だ。大阪大学で大学院生だった飯野の指導担当をしていたという中留は、法歯学者で、歯学の立場から法医解剖に立ち会う。2011年の東日本大震災で国

ている。

飯野は、2008年からおよそ1年間、このビクトリア州のビクトリア法医学研究所の客員研究員として、Aiを活用した死因究明について研究。鳥取大学では2018年にAiを導入した。

中留は、飯野とともに法医解剖をしながら、予防法医学にも力を注いでいる。なかでも自殺を踏みとどまらせる方策がないかと、学生たちとフィールドワークを重ねながら取り組んでいる。

「明らかに自殺と断定されない事例は、死体検案書のなかで『その他』に分類されるんです。年間の自殺者のデータには反映されないのが、実際はもっと多いと思います」

都市部と違って高層の建物がない鳥取県では、谷や海にかかった橋からの飛び

降り自殺が多い。その場所に容易に登ることのできない柵や看板を取り付けることも効果的だと、自治体などに提言している。

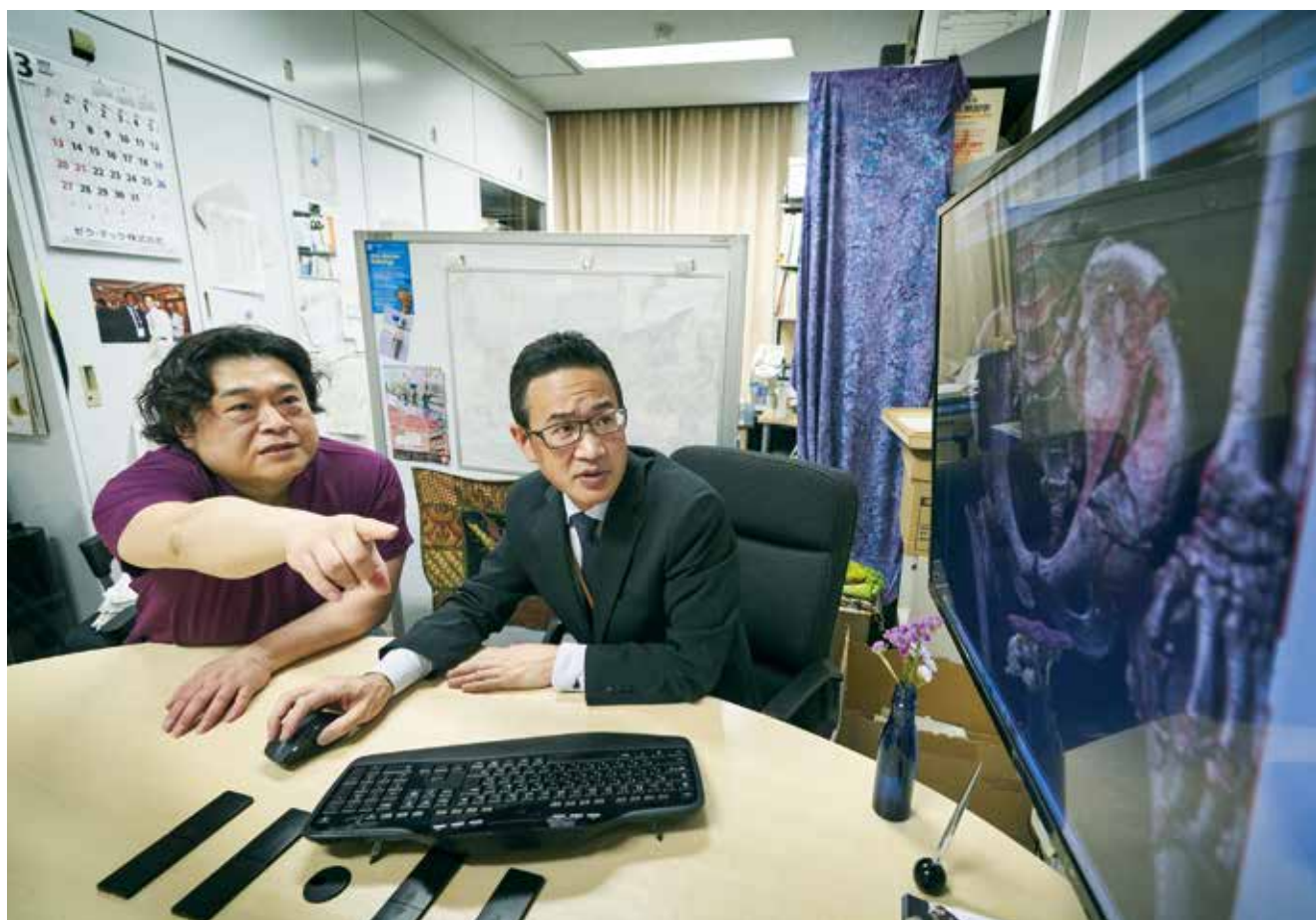
予防法医学で、飯野がここ数年力を注いでいるのは、入浴時の突然死である。「交通事故で亡くなる人は年々減少していますね。車両に安全装置が付いたり、さまざまな啓発活動も行われている。でも、お風呂で亡くなる人は年間2万人もいて、交通事故での死亡者数をはるかに上回っていることはあまり知られていないんです」

入浴時の突然死といえば、ヒートショックを頭で浮かべる人も多いだろう。冬場、暖房の効いた部屋から浴室に行くと寒暖差で血圧が上昇する。そのあと浴槽に入ると今度は急に身体が温まることで血圧が下降する。この急激な血圧の乱高下によって脳卒中や心筋梗塞などの病気が起こるというものだ。

しかし、入浴時の死亡原因で多いのは、実は「熱中症」なのだと言っている。

追い炊き機能付きの温水器が普及し、設定温度を長時間保つことができるようになった。高温設定したお湯に長くつかることで血管が拡張し、血圧が低下する。のぼせていることに気付かないまま、意識がなくなり溺れてしまうのだ。この場合の死因は「溺水」とされる。

お風呂で亡くなった高齢者の画像を参考にと見せてくれた。まさかこの後、死



高度救命救急センター上田敬博教授と死因について意見を交わす。

が待ち受けているとは予想もしなかっただろう穏やかな顔がかえって痛々しくも思えた。

「家族が何分かごとに声をかけてあげていたら、温度を少しずつ下げる機能が付いていたら、この人たちは死なずに済んだんです」

そして、昨年から救命救急センターとの合同カンファレンスを開始した。救急医療の現場では一刻を争いながら治療しなければならぬ。そこで残念にも亡くなってしまった方を法医学で解剖すると、病気の要因が見つかることもある。それが次の救急医療に繋がるのだ。

命の灯が消えてしまった身体を診る医師は、その死因究明をすることで大きな社会的役割を担っている。一方で、その肩には、医療の未来も担っているのだ。想いはただ一つ、――防げる死を防ぎたい――。

飯野 守男

1971年鳥取県米子市生まれ。解剖学者の父を持ち、中学生の時に法医学者を目指す。鳥取大学医学部卒業、大阪大学大学院で博士号取得。京都大学、大阪大学、慶應義塾大学で勤務したのち、2015年に母校鳥取大学医学部法医学分野の教授となった。趣味はサイクリング。

中留 真人

1968年広島県呉市生まれ。1985年の日航機123便墜落事故のニュースで身元特定に法歯学者として用いられていることを知り、法歯学者を目指す。広島大学歯学部卒業。大阪大学、藤田保健衛生大学、長崎大学で勤務後、2017年に鳥取大学医学部法医学分野准教授に就任。



内から多くの歯科医が集められ、「歯」が個人識別に活用されたというニュースをご覧になった方も多いだろう。

藤田保健衛生大学（現藤田医科大学）を経て、長崎大学で研究を続けていた2017年、その頃、既に鳥取大学医学部法医学分野教授となっていた飯野から「こちらに来て、Ai（オートプシー・イメージング）をつかった研究をサポートしてほしい」と声を掛けられ、鳥取に赴いた。

Aiとは、死亡時画像診断のこと。CTやMRIを用いて撮影し、遺体内部の情報を得る。解剖の要否判断や死因究明の精度向上に有用とされる。法医学の最先端ともいわれるオーストラリア・ビクトリア州では、異状死の場合、Aiが解剖前の予備検査として義務付けられ

医師は「免疫力」という言葉を使わない？
発酵食品が有効？

知っておきたい

免疫のホント

免疫の機能は3つ

「疫」を「免れる」と書いて免疫。免疫とは、疫病（感染症・伝染病）からまぬがれる、すなわち病原体から体を守るための仕組みである。何重にも防御システムが働き、関係する細胞の種類が多いため、理解することは非常に難解だ。

「免疫には攻撃・抑制・記憶の機能があることをまず覚えてほしい」と常世田^{とこよだ}は前置きした。

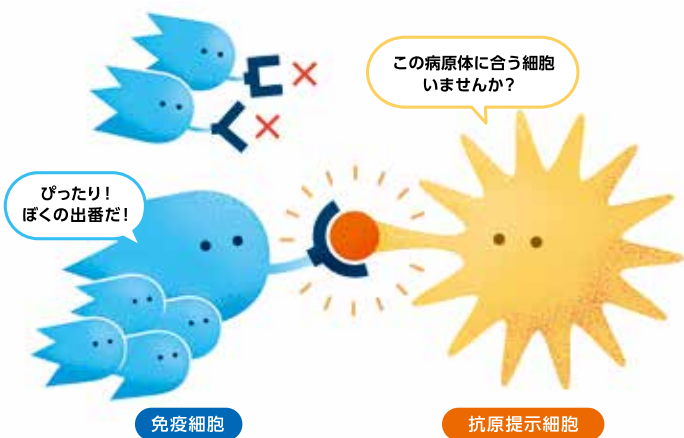
身体に病原体などが侵入すると、生体反応として炎症が起きる。そしてその炎症に対し3つの機能が作動すれば、初回こそ治癒に時間を要することもあるが、二度目は、以前の記憶から、すぐさま反応して炎症を起こすこともなく対処できるようになる。

この状態を「免疫がついた」と表現する。この応用がワクチンである。

昨今、我々を悩ませている新型コロナウイルス——感染症を例にして考えてみよう。

感染症を引き起こす主な病原体は、細菌とウイルスの2つ。これら病原体が身体に入ると、まず皮膚や粘膜といったバリア機能が働く。そこで防げなかった場合、次に働くのが免疫細胞だ。

実は人間の身体には、新型コロナウイルスをはじめ、すべての病原体に対する免疫細胞が備わっているという。その種類は何億、何兆種類である。だとすれば



自分が対応すべき病原体だと認識すると、数を増やし立ち向かう。

免疫細胞があれば、人間の身体は防御されている、はずである。

ここで問題なのは、一つひとつの病原体に対する身体の中の免疫細胞の数が少なくまだまだ未熟であることだ。

「ある病原体に対する免疫細胞が、抗原提示細胞からの情報で『自分の出番だ』と認識すると、攻撃に向かうためにその数を増やし、成熟していきます。皮膚や粘膜などのバリア機能が働くのは、ある意味、免疫細胞の数を増やすまでの時間稼ぎでもあるのです」

病原体が身体に入ると、それを排除しようとして発熱や痛み、倦怠感など様々な症状が現れる。それらのほとんどは免疫反応であると考えられている。

発熱は免疫細胞が活性化するための副

作用と考えて欲しい。

細菌やウイルスは、身体が高熱になると勢いが急激に落ちる。一方、免疫細胞は熱が上がるほど力を増す。あまりにも早い段階で解熱剤などを飲んでしまうと炎症が癒った状態^{やぶ}で長引いたり、うまく記憶されず、同じ病気にまたかかったりしてしまうことがある。

「ワクチン接種で鎮痛薬を服用すると、免疫記憶ができないということが先日もニュースで取り上げられていました。やはり、身体から発せられるアラートは深い意味があることを理解しなくてはいいません」

また、免疫細胞が活性化する際には、糖と酸素を消費する。

風邪で体が痛い、倦怠感を感じたりす

るのは、筋肉が糖と酸素をよく使うからだ。倦怠感が出るのは、筋肉を使わないようにして免疫細胞に優先して糖と酸素を送っているのだ。頭痛も、脳が糖を大量に消費することと関係あるとされている。

人間の体は消化にとってもエネルギーを使う。食欲不振もエネルギーを胃腸の免疫細胞に行くようにするために起きている。そうやって、遮断をしながら体全体で免疫にエネルギーを回す。

「解熱や鎮痛のため薬を使うのは、それらの症状でどうしても眠れないとき。睡眠、つまり休むことは免疫にとって最も大事なことです」

仕事や学校に早く行かなければと安易に薬を服用するのは、正しい使い方とは



免疫には攻撃、抑制、記憶の機能があり体内の炎症に対処している。

コロナ禍において、しばしば話題にあがるのが、「免疫」という言葉。新型コロナウイルスのために「免疫力」を上げなければならない、そのために「免疫力」を上げる食べ物摂取しよう、といった類いだ。そもそも免疫とは何なのか——鳥取大学医学部生命科学科で免疫学を担当する常世田好司教授に聞いた。

取材・文 中原由依子
イラスト 矢倉麻祐子

小山 哲史さん
医師 (耳鼻咽喉科・頭頸部外科)

👉 番長CHECK!!

白パーカーとネイビーコートの小山先生のさわやかな着こなしは、女性陣から大好評。足下からのぞかせた靴下の水色がおしゃれなアクセントに。

『すらっとした自分のスタイルに似合う服を選んでいらっやいますよね』(マリーナ)
『とにかく色合わせが絶妙。白、ブラウン、ブルーの配色の見せ方にうなりました』(編集 O)



尾崎 加苗さん
医師 (病理診断科)

👉 番長CHECK!!

「流行のアイテムは、長く使えないから取り入れない」のがファッションポリシーという尾崎先生。撮影日は大雪が降っていたため、ボリュームあったかボンチョスタイル。くるぶし丈のパンツですっきりバランスをとっています。

『講義の時もいつも個性的なおしゃれで、女子学生のファンが多いんです』(イノー)



FASHION CHECK

ファッション番長が辛口でぶった切る？

とりだい病院★ ファッション チェック！

メディカルスタッフは病院内ではみな白衣やスクラブなどユニフォーム姿。でも実はおしゃれな人が多いんです！とりだい病院スタッフの普段着を、ナゾのファッション評論家「ドン・クロサキ」たちが論評。みなさんのファッションの参考になる、かも。

細川 雅代さん
医師 (女性診療科)

👉 番長CHECK!!

一見普通のワンピース。でもブリーツ部分の切り替えや、前と後ろの丈が違うなど、こだわりが詰まった一着。あわせたファーベストも華やか。

『靴も本当にかわいい。もこもこの部分がいろんなカラーになっているのがよいですね』(イノー)
『フェミニンな感じがご本人に似合ってます。ベルトとブーツの黒で、甘いだけじゃない着こなしになっているのが素敵』(マリーナ)



別名「クロサキズ・エンジェル」だ!!

イノーちゃん：いつも元気で密かに辛口。なぜか病院内にネットワークを持つ。医学部医学科の学生という噂。(左)

ドン・クロサキ：正体は不明。角盤町で洋服を買い込んでいる姿が目撃されることも。脳神経外科に生息しているようだ。

マリーナ：ドン・クロサキが一目置く、白衣のファッションISTA。ちょっと水トアナ似(?)。(右)

取材・井野寿音 構成・大川真紀(編集O) 写真・中村治

みなさんの
オシャレを私たちが
チェックします！



身体を休ませることによって、糖や酸素が免疫細胞の活性化に使われる。

免疫機能の維持に必要なこと

言えない。

新型コロナウイルスにおいても、免疫力を高めるという言葉をよく耳にする。この「免疫力」という言葉は、医療用語ではない。そして、定義が曖昧だ。

前述のように、免疫細胞が活性化するためには、糖や酸素、タンパク質、脂質といった基本的な栄養素の他、鉄分やビタミンなどが必要である。ただ特別に何かをとればいいということはない。偏食や極端なダイエットなどで栄養が足りていないのであれば別だが、大抵は普通の食事をしていれば問題ないと常世田はいう。

酸素については血管が関係している。血行が悪く、末梢の血管まで酸素が届かない状態があると、免疫細胞がいざという時に働かない。

「冷え症の人であれば足や体を温めること、お肉をあまり食べない人ならば、タンパク質を別の方法でとることが、免疫機能を維持するために必要かもしれない。個人個人で違うので、何が足りていないかなど、自分の体の状態を深く知ることが大切です」

「免疫力」を上げるには発酵食品がいと耳にすることがある。

発酵食品にはタンパク質を構成するアミノ酸が含まれている。また腸はもともと細菌が多く炎症の起きやすいところ。

そのため腸内環境を整えることは、免疫機能を保つためにも大切だ。

また忘れてはならないのは、加齢により免疫細胞の働きが鈍化することだ。

免疫細胞は骨髄で作られている。そして、特に病原体に反応する細胞や炎症を抑える抑制系の免疫細胞は、胸腺という組織で成熟する。しかしこの胸腺は、思春期をピークに、その後は年齢とともに退化していく。高齢になるにつれて、病気になるのが早くなる。高年齢になるにつれて、病気になるのが早くなる。高年齢になるにつれて、病気になるのが早くなる。

「生物学的に人体は、おそらく思春期までが外敵への備えが万全となるように作られているのかもしれない」

昨今、免疫の老化が身体への老化につながるということが分かっていく。しかし、どうやって免疫の機能を維持していくかは研究中である。老化した細胞を除去して、若い細胞に入れ替えるといった研究も進んできているという。

常世田は最後にこう呼びかける。

「免疫を第2の自分と捉え、もつと大事に付き合っていくことが重要。日本の社会は医者任せすぎ。自分の身体、免疫、健康のことをもう少し自ら学ぶことが必要なのは自分を守るの免疫なのである。



宮代 浩子さん
看護師（6A病棟）

👉 番長CHECK!!

春だからデニムを選んだという宮代さん。レイヤードしたギンガムチェックが映えて、さわやかな着こなしに。「ワンピースは脱ぎ着が楽なのでよく着ます。おしゃれポリシーは楽なこと」と笑います。

「スリッポンタイプのぽっこりした靴に短めソックスを合わせた足元がよいですね」（マリナー）
「明るめデニムの色がありそうでない感じ。とても似合ってます」（イノー）



貝谷 紀枝さん
看護師（7B病棟）

👉 番長CHECK!!

ホワイトベースにデニムアウターのブルーが目を引くスタイリングの貝谷さん。撮影日は気温が高めだったので温度調整しやすいものを選んだのだそう。太めボトムなのに重さを感じさせないさわやかな印象のスタイルです。

「小柄な方ですが、縦にバランスをとって低さを感じさせないバランスがうまいと思います」（マリナー）
「ボーダーだけど横長にならない、すらっと見える着こなしがいいね」（ドン・クロサキ）

吉田 賢史さん
医師（放射線治療科）

👉 番長CHECK!!

コーデのポイントは「普段着なので特にないです」という吉田先生。ご自身のおしゃれよりも、背景に写っている新規導入の放射線治療機器を見てほしいそうです。さまざまな質感のアイテムを、統一感のある色でまとめているのがさすがです。

「レイヤードしたチェックシャツの色が着こなしを際立たせてますね」（ドン・クロサキ）
「大人の上質カジュアルといった感じ。おしゃれがこねられている感じです」（編集〇）



高田 有花さん
助産師（3AD病棟）

👉 番長CHECK!!

パーカー、リュック、スニーカーを合わせた軽快なスタイル。「自転車通勤なので、漕ぎやすい服装にしています」デニムアウターの切りっぱなしの裾と、スニーカーのワンポイントの赤が、シンプルなのにピリッとしたアクセントになっています。

「ナチュラルな中にも、個性を感じさせるアイテム選びがさすが！」（編集〇）



深田 敦子さん
看護師長（医療安全管理部）

👉 番長CHECK!!

着こなしのテーマは「おば・かわいい＝年齢を重ねてもかわいらしさ」という深田さん。春を意識しつつ、実は冷え対策はバッチリのスタイルなのだそう。

「タートルに厚底靴ってすごくかわいい」（マリナー）
「ショートヘアを活かしたバランスが素敵」（イノー）



多智花 翔さん
診療放射線技師（放射線部）

👉 番長CHECK!!

普段からきれいなスタイルが多いという多智花さん。この日はナイロン素材のコート、スラックス、ブーツを黒で統一しつつも質感の変化でメリハリあるスタイルに決めていました。表情にも注目。

「普段のユニフォーム姿からは想像ができないギャップがいい」（ドン・クロサキ）
「色白な方だから、黒がすごく映えてますね。肌に似合う色をわかっていらっしゃる」（イノー）



松尾 紀子さん
医師（救命救急センター）

👉 番長CHECK!!

着心地のいいシャツとデニムを、ムートンブーツにインしたスタイル。襟や袖のあしらい方におしゃれの工夫を感じます。

「シンプルだから、姿勢のよさや鍛えておられるスタイルが引き立ちますね」（ドン・クロサキ）
「ご本人のたたずまいがとにかくカッコいい。生き方がおしゃれに現れている感じがします」（編集〇）

橋本 祐樹さん
臨床検査技師（検査部）

👉 番長CHECK!!

「大人のスタジャン」がコーディネートのポイントという橋本さん。「このスタジャンは、オーダーメイドでつくった世界で一着の組み合わせのもの」なのだそう。裏地はなんとダルメシアン柄。見えない部分にもこだわるおしゃれ上級者です。

「第二ボタンだけメタリックになっていたり、袖のレザーの切り替え、スマートなシルエットとか、スタジャンに見えないのがいい」（イノー）
「僕もこのスタジャン、オーダーではないですが、2種類持ってます」（ドン・クロサキ）



和田 崇さん
理学療法士（リハビリテーション部）

👉 番長CHECK!!

さらっと羽織ったダウンにデニムと、正統派の大人カジュアル。実は組み合わせたアイテムは、素材やシルエットにひねりがあるものばかり。甲の部分にムートンファーを合わせたチロリアンシューズがポイントです。

「カーキアウター、セーターの柄、靴の色で統一感を出しているのがすごくおしゃれ」（マリナー）
「ひとつひとつのアイテムにこだわりを感じる。ダウンなのにすっきり着こなしてすごい」（イノー）



若原 誠さん 細谷 恵子さん
医師（乳腺内分泌外科）

👉 番長CHECK!!

「クレリックシャツが好きなんです」（若原先生）「お気に入りジャケットで来ました」（細谷先生）というお二人はなんとご兄妹！若原先生の靴の色と、細谷先生のスカートの色がマッチして、おしゃれのコンビネーションもさすがです。

『とにかくさわやか。お二人の仲のよい関係性が見えるたたずまいがよいですね』（編集〇）





コロナ禍の 看護師たちとの交流

原田 エリーさんの絵、制作途中から何度も見に来ましたが、本当にいいですね。病院の壁に作品を描くのは初めてだったんですか？

大宮 ええ。ずっと病院やホスピスに絵を描けたらいいなと思っていました。自分の絵で患者さんや医療従事者の方に元気になってもらえたらと。それが鳥取で実現するというのは想定外でした。なぜ鳥取？って（笑）。

原田 このプロジェクトは、昨年10月にエリーさんに病院へ来ていただいたことから始まりました。新型コロナウイルス対策のために、病院関係者は会食を控え、県外への旅行もできなくなりました。看護部から何かストレスを発散できる院内イベントを開催してほしいという依頼がありました。そこでエリーさんをお呼びすることにしました。

大宮 「笑えるトークショーを」と広報の方に言われたんです。じゃあ、芸人さんに頼んだほうが間違いないですよって答えたんですね。でもそうじゃなくて、以前、鳥根のイベントで見たような、インタラクティブにお話し合うような、ゆるいトークショーっておっしゃるの。そうか実際に、私のイベントをご覧になっていただということ引き受けることにしました。

原田 イベントのタイトルは『スナックエリー』。エリーさんがママとなって、いろんな看護師の話を聞くという設定でした。

大宮 病院内だからお酒は出せませんが、点滴置いておきますって（笑）。制服姿の看護師さんとお医者さんがずらーっと座っている。目の前に原田院長がでーんと。怖かったです（笑）。

原田 みんなエリーさんに会いたかったみたいで、盛り上がりましたね。印象的だったのが、「コロナ禍になって先が見えない、どうしたらいいですか」って質問に対するエリーさんの答えでした。

大宮 看護部長さんでしたね。えっ、そんなこと私に聞く？って（笑）。困ったなと思ったけど、ふと私から素朴な疑問が。で、逆に質問したんです。「では、コロナになる前は先が見えていたんですか」って。そうしたら、「えっ」っていう顔になって「見えていなかったです」って。だから、こう言ったんです。「ここにいらっしやる皆さんは先の見えない仕事に好んでついた変態なんだ！」って。

原田 みんな爆笑でした。

大宮 イベントの後、病院長に私の画集をお渡ししたら、パラパラと見て「エリーさん、病院で絵を描いてよ」って。そのときは本当にやると思っていなかったんです。東京に戻ってしばらくしたら正式に絵を描いて欲しいという連絡が。えっ、一回打ち合わせさせてくださ

いって、米子に戻ってきたんですね。

原田 年明けにお見えになりました。

大宮 色々と考えたんですけれど、大山とか描きましかって提案したら、鳥取とかそういうのは頭から外してほしい。病院に関係ない絵にしたいとおっしゃった。

原田 患者さん、ご家族の方たちはとても重い気持ちを抱えて病院におみえになっている。その人たちが、一瞬どこにいるんだろう、ここはどこなんだろうって思うような絵がいいなと思ったんです。エリーさんの作品に、リゾート地の絵がありました。リゾート地、海が見える絵がいいとリクエストしたんです。

大宮 病院にリゾートって不謹慎って言われないかと心配しましたよ。

父親を救いたいという思いで 薬学部へ

原田 エリーさんは東京大学薬学部を卒業。今なされている仕事と全く違いますが、えっ、

大宮 本当にやりたかったのは地球の環境保護、植物の研究者になりたかったんです。そんなとき、病気がちだった父親に発作が起きたんです。救急車で運ばれて、一歩遅かったら死んでいたと言われました。そのとき何もできなかった自分が歯がゆかった。地球を救う前にお父さんを救わなきゃって、進学先を薬学部

にしたんです。ところが気持ちは純粹でしたけれど、入学してみたら全く授業についていけない。

原田 医療とは縁があったとも言える。大宮（首を振って）私、病院、嫌い。ここで、そんなこと言っちゃいけないか（笑）。でもあんまり好きじゃないのは事実。ちよっと身体の調子が悪いと病院に行く人いるじゃないですか？ 私は全然行かない。

原田 病院によく行く人とそうでない人の差が激しいというのはあります。

大宮 小学校のとき母が病気になったんです。そのとき風邪だって言われて寝てればいつか。別の病院で診てもらったら肺炎だと判明したんです。早くわかっていれば重くならず済んだのですが。それからずいぶん後、母が子宮筋腫になったんです。お医者さんはすぐに手術して切れと言った。ところが別の病院で、切らなくてもいいと薬をもらったら良くなった。

原田 婦人科の医師として答えると、お母様の生理の出血量が多かったんでしょう。年齢、閉経もあって薬でコントロールできるようなった。オペ（手術での切除）、投薬治療、どちらも正解なんです。オペならば一回で終わる。時間を掛けて薬でコントロールしていくか。

大宮 私たちは素人だから。なので、最初から選択肢がわかるといいんですけどね。

原田 今はロボット支援手術や腹腔鏡手術など侵襲の少ない、つまり身体に負担が少ない手術がある。最初の医師は痛みが長く続くので手術という選択をしたと思われます。ただ、大切なのは患者さんの気持ちです。二つの選択肢を患者さんに示して「どうしますか」って言わなきゃいけない。それが今の医療の流れです。

大宮 患者さんが「他の手段」を開きやすい環境が全国に広がってほしいです。

ここ米子から……。

原田 (腕組みして) 確かに手術が好きで医者というのがあります。そういう人は手術を勧めがち。本当は、私はこの手術は得意だけれど、薬という選択肢もある。薬の得意な医師を紹介しますという連携があればよかった。自分が得意な治療法に患者を付き合わせてはならないんです。

大宮 エッセーに面白いから書いたんですけれど、体調を崩して病院に行って「私、風邪引いちゃったみたいなんです」

と言ったら、「風邪かどうかは医者が決めるんです」とムツとされちゃって。謝りつつ、こんな症状ですが、なんだかわからないんです、って言い直したんです。**原田** (苦笑いして) 無駄にプライドが高い医者ですね。**大宮** だからとりだいい病院に来て驚いたんです。原田病院長を始め、皆さんが話しやすい。風通しがいい感じがする。**原田** 風通しがいいと言われるとすごく嬉しい。我々は常に、医療の安全を担保すること、つまり医療事故を少なくすることを考えています。その一番の策は、風通しを良くすること。みんなが気軽にいろんなことを言えるという雰囲気を作ることがすごく大切。不都合なことがあって隠せば、それが常態化して、医療事故につながる。透明化ですね。

医師は言葉で、画家はアートで、癒し、力を与える。

原田 ところで、エリーさんって、作家であり脚本家であり映画監督でもある。そのエリーさんはなぜ画家になったんですか？

大宮 東日本大震災前、バルコミュージウムの方から「エリーさん、いろんな仕事していますけど、アートだけはやっていませんよね、展覧会やりましょう」って言われたんです。私、何も作品ありません、って答えたら、「じゃあ作りましよ

ておっしゃってください。着物姿でがぶ飲みして描いたら、ウケたというか(笑)。絵もたまたま良かったそうで、ベネッセの会長で、瀬戸内国際芸術祭のプロデューサーでもある福武總一郎さんの所蔵になったという(笑)。

原田 上手く言葉にできないんですが、エリーさんの絵って、見ていると力をもたう感じがする。絵にパワーがある。絵を描いているときは、何かに筆を持つ手が動かされているみたいな感じなんです。

大宮 うーん、そこに私はいないという感じです。私は無になっていて、自然界からいたたくパワーを転写して絵にしているだけです。今回、患者さんに見守られながら描きました。海から太陽が昇る絵は、生きるエネルギーと、今という喜び、そして天から無限に降り注ぐ愛を転写しようと決め、一心不乱に描きました。それを見ていた患者さんが、別れ際、こう言ってくれました。「希望の光をありがとう」。泣けました。

原田 エリーさんと話をしていると、ムンテラっていう言葉が頭に浮かんでくる。元になっているのはドイツ語の「ムントセラピー」。ムントとは口のこと。言葉で治療するという意味です。昔はよく「医者はムンテラが大事だから」と言われました。手術をする、薬を投与するのはもちろんですが、医療従事者は、患者さんを癒やす、力を与えることが大切。

う」という話になった。私は「えーっ、て(笑)。でも、飛び込んでみよう」と震災があつて一回流れた。でもまたバルコミュージウムの新担当の方がやってきて、「やりましょう」って。「えっ、覚えていたんですか」って(笑)。

原田 テーマは何か決まっていたんですか？

大宮 ある方と対談したとき、震災で、心の傷を負ったことを伝えられない人がいる、どうしたらいいですか、という話が出ました。これだっと思ってたんです。そういう「思いを伝えるということ」という展覧会にしよう。演劇だと役者さんが舞台の中の主人公ですが、この展覧会ではお客さんが主人公になって、いろんな舞台装置を開けたり、登ったり、体験していくんです。たとえば、人生にはさまざまな「ドア」が立ちほだかりますよね。私たちは子どもの頃、その「ドア」を開ける鍵をたくさん持って生まれてきたはずなんです。それをいつの間にか忘れちゃっている。『私たちはだかるドア』という作品は大きなドアの前の床に、百個ぐらいの小さなさまざまな鍵が散らばっている。来場者は直感で鍵を選ばないといけない。選んでドアに差し込む。すると、ドアがバーンと開くんです。人生にたちはだかる困難に立ち向かい、それが開いていく、その感覚を、体感してもらう。嬉しいもんですよ。実はどの鍵も開くようになっていたんですけれど。

エリーさんの絵を見て患者さん、とりだしい病院の人たちが元気になるてもらえれば嬉しいですね。

原田省 鳥取大学医学部附属病院院長

1958年兵庫県出身。鳥取大学医学部卒業、同学部産科婦人科学教室入局。英国リーズ大学、大阪大学医学部第三内科留学。2008年産科婦人科教授。2012年副病院長。2017年鳥取大学副学長および医学部附属病院長に就任。患者さんと共につくるトップブランド病院を目指し、未来につながる医学の発展と医療人の育成に努めながら、患者さん、職員そして地域に愛される病院づくりに積極的に取り組んでいる。好きな言葉は「置かれた場所で咲きなさい」

大宮エリー 作家・画家

東京大学薬学部卒業。2012年、東京国立博物館で行われたモンブラン国際賞の福武總一郎氏の受賞セレモニーで急遽依頼されたライブペインティングから画家のキャリアがスタート。2016年には美術館での初の個展「シンシアリー・ユアーズ」(十和田市現代美術館/青森)を開催。同時に商店街を使ったパブリックアートも手がける。また十和田市の水力発電所、奄美大島のこども図書館、妹島和世氏による家プロジェクトなどで壁画作品も制作。2019年には香港、ミラノ、パリにて、2022年にはロンドンのギャラリーブリアにて個展を開催。瀬戸内国際芸術祭2022でも出展作家として大島に作品を発表。



原田 素晴らしいアイデアです。目の前のドアが自分の選んだ鍵で開くとただか自信がわいてくるような気がします。**大宮** 実際に絵を描くことになったのは、とあるハプニングから。私の舞台装置的な作品がある大きなパーティーで展示されることに。ですが、打ち合わせで担当者の方から、相談されたんです。「実は明日、ライブペイントをする海外のアーティストがこれなくなっちゃった。すごく困ってる！エリーさんしかやっ



てくれそうな人いない！助けて！」と。

原田 ライブペインティングとは、その場で絵を描くパフォーマンス。そのとき、絵を描いていたんですか？

大宮 (大きく首を振って) まったく。「小学校の写生大会で、消防自動車を描いた以来ですよ？」って答えたんです。そうしたら「それでもいい」って。もうやるしかないって。そしたら会場にいらした、(建築家の)安藤忠雄さんが、「もうワインでも飲んで描くしかないよ」っ

ふみ日記

第二回

もし、あのとき
「とりだい病院」に
入院していたら

前回のコラムが掲載されてから、お店で声をかけていただくことが増えた。医療のいの字もない上にかなり個人的なことが綴られているので、正直、私のページは読み飛ばされるだろうと思っていた。多くの方が読んでくださって、本当にありがたい限りだ。どうか今回も、最後までお付き合いいただきたい。

うちを訪れるお客様は、ほとんどが外来の患者さん、もしくはそのご家族だが、入院中の方も時々来てくださる。入院中で本を選んでいらつしやるのを見かけると、無事退院できますようにと祈る一方で、私もここに通えたらよかったのになと、ついっ

思ってしまう。

時は2018年の暮れ、私が小説家としてデビューする前にさかのぼる。
体が丈夫だと自負していたが、思いがけず健康診断に引っかかり、とりだい病院ではない、別の病院に入院し手術をすることになった。人生初の体験、しかも2週間ほど療養期間をいただけるということで、妙なスイッチが入った。

「時間がたっぷりあるんだし、読んだことのない名作にも挑戦してみよう。この機会にしっかりと勉強して、絶対ステップアップ

するぞー」

いそいそと本を買い込んで読みに詰め、鼻息荒く病院に乗り込んだ……。のだが、結論から申し上げよう。無理だった。もしタイムマシンがあれば、何がステップアップだよと、当時の自分の頭を叩いてやりたい。もちろん、入院中でも熱心に勉強できる方は、大勢いらつしやるだろう。だが、勤勉でない上に、麻酔が切れてひいひい言っていた私には、難しい文章を読んでその内容を理解するなど、とてもできなかった。結局、3日と経たず本を投げ出してしまっ

た。

この、無謀とも言える計画に頓挫すると、一気に暇になった。

まず、自由に出歩けない。テレビ番組は特に観たいと思わない。ゲームも普段からしない。音楽もそんなに聴かない。SNSで楽しそうな投稿を見かけたら、術後ポロポロになっている自分との差に落ち込みかけない。夜眠れなくなるから(21時消灯に体内リズムが順応できなかった)、安易に昼寝するわけにもいかない。娯楽らしい娯楽がなかったため、一日が非常に長く感じた。

退院する2日前。とうとう我慢の限界に達し、母に頼んで、自宅から何冊か本を持ってきた。そのラインナップは、今もよく覚えている。私が最も敬愛する作家、

川上弘美さんの『天頂より少し下って』や、西加奈子さんの『漁港の肉子ちゃん』などだ。心身ともに疲弊していた私は、差し入れの本を貪るように読んだ。

『天頂より少し下って』は、あたたかさやユーモア、とらえどころのない切なさで詰まった文章に、ため息をつきたくなるほどの感動を覚えたり。『漁港の肉子ちゃん』は、主人公の母・肉子ちゃんのおばかつぷりとバワフルさに、とにかく元気をもらったり。ページをめくっている間は、狭苦しいベッドの上ではなく、どこか別の世界に連れ出してもらっているようだった。手術でできた傷の痛みも、そのときは忘れられた。そして改めて、私は小説が好きだなと実感した。

このときの経験がなければ、私はいつまで経っても小説を書きだせなかったかもしれない。

今、店頭に立っていると、入院していたのがとりだい病院で、そのときすでにカニジルブックストアがあればどうなっていただろう、と想像することがある。

おそらく本は持参せずに、最初からカニジルブックストアで調達していただろう。その場合、夢中になれる本を他にも見つけていたかもしれない。あるいは、難しい本に手を出して挫折するという、まったく同じ道を辿っていたかもしれない。もし後者だったなら、未だデビューできていなかった可能性も、大いにありえる。

しよせん飯の話だから、どうなっていたかなんて、考えたところでわからない。それでも、本を選んでいる間は非常にわくわくしただろうな、ということだけははつきり

角田さんの「先入観を持たない」という姿勢にも惹かれた。

為本さんは、現在、とりだい病院の内視鏡センターに所属、胃カメラや大腸内視鏡検査を受ける患者と日々接している。同じ内視鏡検査でも患者はみな違う。為本さんも先入観を持たないことを常に意識している。そのため入室される患者一人ひとりに優しく話しかけ、その人が抱える不安が何かをちゃんと理解しようと努めている。「前より今日の検査は楽だったわ」と言われるのが何より嬉しい。

今もなお、医療者は慎重な行動を求められている。自由に旅はできないが、為本さんは自分なりに生活を楽しむ工夫をしている。「初めて家族でキャンプに行って、自然の中で子供たちとテント張りや虫取りをしました。他にも、行ったことのない公園を探して出かけています」

遠くに行けなくても、いつもと違う非日常を感じることができれば旅の気分は味わえるという。「でもコロナが落ち着いたら、本に出てきた国々に、家族と行ってみたいですね」

その日が早く来ることを、為本さんは願っている。

文・中原由依子 写真・中村治

「いつも旅のなか」

角田光代／角川文庫



院内の書店の児童書コーナーで、熱心に本を選んでいる人がいた。本好きであろうと確信して声を掛けた。看護師の為本真史さんだった。彼に「人生を変えた一冊」を尋ねると、迷わず、『いつも旅のなか』という答えが返ってきた。

著者は角田光代さん。世界中を旅し、その土地で出会った人や体験した出来事を臨場感たっぷりに書き記したエッセイ集だ。
本との出会いは2年前。新型コロナウイル

ス感染症の感染拡大により、緊急事態宣言や外出自粛など県境をまたぐ移動が制限された頃である。為本さんも旅が好きだった。しかしこれまでのように自由に出かけることができなくなり、少し気持ちが塞いでいたという。

「タイトルに惹かれて手に取りました。いろんな国のことが書かれていて、本当に本の中でその国を旅しているような気分になりました」

まず共感したのは、角田さんの旅のスタイルだ。スケジュールを決めすぎず、荷物はリュックサック1つだけ。現地でもすぐに人と打ち解け仲間を作る。行き当たりばったりでもそれを楽しむ大らかさを感じた。自分と同じだと思ったのだ。
岡山県出身の為本さんは看護師になるため鳥取大学医学部保健学科に進学した。高校では看護師を目指した男性は為本さん一人だった。入学してみると、男性は同学年にも上級生にもいた。やがてバイク好きの男子学生が4人集まり、長期休みになるたびにバイクの旅に出かけた。近畿地方や中部地方、遠く北海道まで足を伸ばしたこともある。北海道では2週間、行きたいポイントだけ押さえて後は成り行きに任せて走った。最北端の宗谷岬で、バイク旅行者対象の宿泊施設であるライダーズハウスに泊まった。そこで一人の青年に出会った。彼は九州から自転車での日本縦断に挑戦しており、この日、ゴールの宗谷岬に到着したのだった。5人でゴールの喜びを分かち合い、お互いの旅の話をし、最後は松山千春さんの歌を大合唱したという。
角田さんの本を読み進めるうちに、カメラを持って妻と出かけた旅など、楽しかった思い出が次々甦ってきた。

本は命の泉である

とりだい「人生を変えた一冊」

看護部
為本真史

カニジルご意見箱

通称

カニ箱



読者からQ

4月から医学部に入学する学生です。バックナンバーすべて拝読しました。とりだい病院の先生方や看護師さん、スタッフの熱い想いや取り組み、今後の課題などを知ることができました。今度はラジオも聴いてみます。カニジルファンとして応援しています。(Kさん)

読者からA

ファンになってくださりありがとうございます。「カニジル」から病院の取り組みやスタッフの想いを感じていただけてるなんて、製作者として冥利に尽きます。

なんと！今号、ファッションチェック特集の企画立案をした井野さんは、「カニジル」を読んで当医学部の受験を決められたそうです。カニジル編集部では、学生さんたちのアイデアやご意見をお待ちしています！(中原)

カニジルへのご意見・ご感想を募集中！



www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/kanijiru/e/

とりだい病院ホームページからもアクセスできます。

トップ＞病院のご紹介＞当院の広報物＞読者アンケート回答フォーム

抽選で
カニジル
ステッカー
プレゼント！



※ステッカーの種類は選べません。



鈴村 ふみ

1995年、鳥取県米子市生まれ。立命館大学文学部卒業。第33回小説すばる新人賞受賞作『糟太鼓がきこえる』（集英社）でデビュー。小説家であり、とりだい病院1階のカニジルブックストア店長。

※『天頂より少し下って』と『漁港の肉子ちゃん』は現在、カニジルブックストアで販売中です。ご興味のある方はぜひどうぞ！

とりだい病院1階、タリーズコーヒーの隣で今日も、皆さまのご来店をお待ちしております。

カニジルブックストアでは、医療やノンフィクションなど、堅めな本の他、大衆小説も数多く取り扱っている。写真集や気軽に読めそうなエッセイ、懐かしい絵本なども、たくさんある。狭い店内ではあるけれど、そのぶん、バラエティに富んだ本がぎゅっと詰まっている。ひいき目なしに見ても、本当に面白い書店だと思う。

と言い切れる。

進化は知識のバトン

『カニジル』も今号で10号を数えた。応援頂いて

いる読者の皆さんに心から感謝を申し上げたい。原田省とりだいい病院長から病院のブランディング向上とともに「もっととりだいい病院の奮闘や新しい取り組みを市民や全国の人に知ってもらいたい。こんな素晴らしい病院なのに知られていないことが残念」と依頼を受け、最初に手がけたのが新しい病院広報誌を出すことだった。

まず頭に浮かんだのが、常識にとらわれず、一番を目指せる人々を編集長ポストに据える事。「確か鳥取に住んでいたと話していた気がする」と曖昧な記憶を頼りに、気鋭のノンフィクション作家として活躍する田崎健太さんに相談した。今までに無い、病院広報誌を立ち上げたいから力を貸して欲しいと話した。2018年秋のことだ。

元小学館・週刊ポスト記者からフリーに転じた経歴から雑誌の編集も可能なのではと安易な考えの私に田崎さんは「雑誌を出すのは、そんなに甘くない」とたしなめられながら詳しく説明してくれた。最後は「やりましょう」と無理やり言質を引き出した事を思い出す。

そして、2019年4月創刊号発刊。カニジルの題を巡っては「こんなタイトルの病院広報誌でいいのかしら」「一回で覚えられる」「郷土料理にちなんでいるから暖かい感じ」と賛否両論だった。実は、田崎編集長が東京から降り立った米子鬼太郎空港で見つけた、カニの味噌汁

が出る蛇口から発想したタイトル。

その後、カニジルは医療の難しい側面を分かりやすく記事に結び、病院に働く人々の苦労や夢までも詳しく伝えてきた。バックナンバーは、鳥取大学医学部附属病院の公式ホームページで見られるのでご覧いただければ嬉しい。

その後も、カニジルは、とりだいい病院を知ってもらうために、様々な派生コンテンツを生み出した。

BSSラジオ「カニジルラジオ」（毎週土曜日昼12時25分放送）はメインパーソナリティーの田崎さんと木野村尚子アナウンサーにご意見番の武中篤副病院長と脳神経外科の黒崎雅道教授が加わり、医療ネタの掘り下げや解説など、新たな番組の魅力をまもっている。時には、県外の熱心なリスナーからも暖かい感想が届く。

また、全国どここの病院を探してもここにしかない本屋さんも生まれた。歌人の俵万智さんや吉本興業・大崎洋会長といった著名選書委員のセレクトブックが並ぶ田崎さんこだわりの「カニジルブックストア」の展開。外来や入院されている患者さんだけでなく、職員、学生、地域の本好きの皆さんにも愛される本屋さんになりつつある。

その他、配布・設置する先から無くなる新病院パンフレット『トリシル』も話題。大山町在住の画家、朝倉弘平さんが描く色鮮やかな表紙

が目を引く。院内の綿密な取材や人物を浮き彫りにするリアルな文章と中村治カメラマンの優しい目線の写真から目が離せなくなる力作だ。『サピエンス全史 上・下』（河出書房）の作者で知られるユヴァル・ノア・ハラリは「進化は知識のバトン」と解く。まさにカニジルの進化と拡大は、とりだいい病院の努力や病院をよくしていこうという気持ちが反映された進化だと私は考える。

とりだいい病院では、新しい取り組みとして国内最大規模の高気圧酸素治療室を活用してアスリートの外傷治療を行い、整形外科や女性診療科とも連携するスポーツ医療をサポートする新組織「スポーツ医学センター」が生まれた。山陰では初だ。また、腎臓病診療の向上を目指し「腎センター」が開設された。

カニジルの取材や進化は、まだまだ続くだろう。とりだいい病院の歩みとともに。そして読者の皆さんとともに。



結 城 豊 弘

1962年鳥取県境港市生まれ。テレビプロデューサー。とりだいい病院特別顧問と本誌スーパージャーを務める。鳥取県アドバイザースタッフ。境港観光協会会長。



今号の「鳥大の人々」に登場した、副病院長の山本一博さんが、中海に浮かぶ大根島を車で走るのが好きだとおっしゃったとき、ぼくと同じだと嬉しくなった。静かな水面がぎりぎりまで迫まる道路をオートバイで走ったとき、なんて気持ちいい場所なんだと思わず、呟いたものだ。この話を地元の人にすると、ふーんという反応が多い。

こちらの人にとっては見慣れた、そして、ありふれた景色なのだろう。

4月、とりだいい病院の外来入り口横に「ゲストハウス棟」がオープンした。二階の「多目的ホール」のこけら落としイベントとして、錦織良成監督の映画『白い船』を上映。実話を元にした、静かな、そして心にしみる名作である（感染症対策のため、入場を病院関係者と入院患者に

限定しなくてはならなかったのは本当に残念だった。

映画の後、ぼくと原田病院長、錦織監督とトークショーを行った。そこで監督たちと、盛り上がったのは、豊かな生活とは何かということだった。都会には地方にないものがある。しかし、逆に地方にも都会にないものがある。都会の生活で疲弊する人は少なくない。

どちらが豊かなのか考えるべきだ、と。

鳥根県出身の錦織監督は東京で生活した時期がある。だからこそ、生まれ故郷の良さに気がつき、この地を舞台とした映画を撮るようになった。大根島の景色に惹かれた山本さんも広島生まれで大阪育ち。その土地の豊かさに気がつくのは、外の人なのかもしれない。

編集長 田崎健太

編集 大川真紀

カニジル、早くも10杯目です。制作側としては、毎回とにかく必死で、「そんなになります?」という気持ち。今回はカニジルを読んで鳥大医学部を選んだ井野さんが、制作に参加してくださいました。編集部から年齢層からは生み出せない、フレッシュなエッセンスが加わった号になったのではないのでしょうか。

編集 中原由依子

朝ドラで“あんこのおまじない”が出てきました。「小豆の声を聞け……何をしてほしいか小豆が教えてくれる」免疫は第二の自分と捉えよというのは、免疫の声を聞けということではないでしょうか。「痛い痛い飛んでいけ」というおまじないもありますし、調子が悪い時は身体を休めて免疫と対話してみましょう。

編集 西海美香

そこはかとなく…。何故だか、こんな言葉がずっと頭のなかを占めていた。取り留めのないぼんやりしたものが形になる。形になると、そこには無限制性すら感じられる。人と人との関係、何かを生み出すこと。明瞭なものとは背中合わせにあるような“そこはかとなさ”という余白。そんな余白を大事にしていこうと思えた今日此頃。

編集 井野寿音

読者の皆様、初めまして。医学科2年生の井野 寿音です。私は大阪出身ですが、カニジルがきっかけで鳥大を受験しました。そんな憧れのカニジルで企画をやらせていただき、広報の方々と一緒にお仕事ができるなんて夢にも思っていませんでした。田崎さんをはじめ、企画に関わってくださった全ての方に感謝しています、ありがとうございます。これから、鳥大病院の魅力をもっと伝えられるように勉強していきます！

写真 中村 治

カニジルも10杯目となりました。創刊から続く裏表紙の写真は、いつも取材の合間に突撃で院内を歩き、その場で撮影交渉をしています。当初は「カニジルの撮影です」との声掛けに、皆さん「なに? カニ?」と不思議そうな顔をされていました。最近では、裏表紙に載る事を察知して逃げ出す方や、即座にポーズをつけてくれる方など、有難い事にすっかり認知して頂けているようです。

デザイン 三村 漢

万象には、潮流のような大きな波長が存在すると改めて感じる事が多い半年でした。良いことが続くと、その後に良くないことが続いたりする。そのプラスマイナス自体が「波長」なのだろうが、それを俯瞰して見ると、良くないこともひとつの意味が存在すると確信して、少し免疫力があがったのでした。

〈 飛鳥の森とは 〉

鳥取大学医学部キャンパス内にある、学生や患者さんが集う憩いの場。「飛鳥(ひちょう)」という言葉には、鳥取大学の一層の飛躍を願う気持ちが込められている。



〒683-8504 鳥取県米子市西町36番地1
鳥取大学医学部附属病院 広報・企画戦略センター内「カニジル」編集部
TEL 0859-387039 / FAX 0859-386992
MAIL byouin-kouhou@med.toridai-u.ac.jp

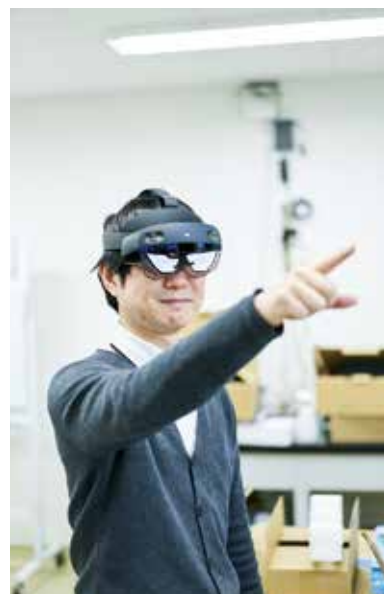


フォトグラファー 中村 治が切り取る
とりだい病院の日常

トリセイト

中村 治

1971年広島生まれ。成蹊大学文学部を卒業後、中国・北京に2年間留学。ロイター通信社北京支局の現地通信員としてキャリアをスタート。ポートレート撮影の第一人者である坂田栄一郎氏に師事。2006年に独立、現在は雑誌広告等のポートレート撮影を中心に活動している。中国福建省の客家土楼とそこに暮らす人々を撮影した写真集『HOME』、2021年12月にはネオンサインを集めた『NEON NEON』(リトルマンブックス)を出版。2020年「さがみはら写真新人奨励賞」受賞。



check!

とりだい情報
日々発信中!



www.facebook.com/ToridaiHospital/



@ToridaiHospital